

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：35302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03223

研究課題名(和文) インドシナ半島における窰窯を用いた焼き締め陶器製作の比較研究

研究課題名(英文) Comparative research of Stoneware making of underground kiln use in the Indochina

研究代表者

徳澤 啓一 (TOKUSAWA, Keiichi)

岡山理科大学・経営学部・教授

研究者番号：90388918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：これまでのフィールドワークでは、中国雲南省、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマーにかけて、窰窯を用いた焼き締め陶器製作の民族誌の全俯瞰を試みた。これらの地域の現生の窰業村において、インタビューや参与観察を通じて、素地製作、成形、焼成、販売等の製作技術や生産様式を整理し、インドシナ半島での窰構造や造窰技術が異なる4つの地域圏を明らかにできた。また、半島内先発開拓国のタイでは、東北部において、19世紀から20世紀にかけての窰跡の発掘調査を通じて、他地域からの技術移転等によって、窰構造が段階的に進化し、焼き締め陶器の大型化や需要の増大に伴って、窰が大型化し、地上化したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで各国単位で窰業民族誌の調査が行われた事例はあるものの、インドシナ半島という広域間での比較民族誌研究は、ほぼ皆無といってよい。考古学的測量調査をもとに、窰構造の4つの地域差を明らかにできたことは特筆できる成果である。また、当該地域の急速な経済成長によって、窰窯を用いた窰業民族誌は、衰退・消滅の危機に瀕しており、これらにかかわる実物資料を取得し、映像等を用いて記録保存したことは、研究資源を保全し、持続的な研究を可能にするきわめて意義ある取り組みであった。

研究成果の概要(英文)：In the fieldwork of this research, we attempted to understand the distribution of ethnography of stoneware making using a underground kiln over Yunnan, China, Vietnam, Laos, Cambodia, Thailand, and Myanmar. Through interviews and observation, by organizing the making techniques and manufacturing styles such as clay needing, forming, firing, and sales of stoneware making villages in each region, the four regions with different underground kiln structures and construction methods, especially in the Indochina Peninsula. In the northeastern part of Thailand, excavation research has led to a gradual change in the underground kiln from the 19th century to the 20th century, due to technique transfer from other regions, and the large size of the pottery and the increase in demand have resulted in a large kiln. It has turned to the ground.

研究分野：民族考古学 考古民族学 博物館学

キーワード：インドシナ半島 窰業民族誌 窰窯 窰構造の地域差 窰構造の変容 大型化と地上化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

インドシナ半島では、急速な経済成長に伴って、焼き締め陶器をはじめとする窯業民族誌が衰退・消滅の危機に瀕している。現生の窯業民族誌を研究の俎上に載せることで、歴史性、民族性、政治性、そして、経済的・社会的背景と関連付けることによって、製作技術や窯構造の差異が惹き起こされる原因やその過程をよりダイナミックに理解することができると考えた。

2. 研究の目的

インドシナ半島において、地下式の掘り抜き窯、すなわち、窖窯を用いた焼き締め陶器製作の民族誌を俯瞰し、焼き締め陶器製作の系譜や地域間の技術的交流を検証する。そして、窯業民族誌の多面的な比較研究を通じて、多様性、系譜性、地域性、そして、世代間の変容を明らかにすることを目的とすることにした。

3. 研究の方法

筆者は、中国雲南省、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマーにかけてのフィールドワークを通じて、まず、窖窯を用いた焼き締め陶器製作の民族誌を全俯瞰することを試みた。

また、焼き締め陶器製作の村々では、インタビューや参与観察を通じて、それぞれの窯業民族誌に関して、素地製作、成形、焼成、販売等の製作技術や生産様式を聴取するとともに、動的な窯業情報の映像を取得した。加えて、実測等の考古学的手法を用いて、粘土採掘坑、製作器種、製作道具、窖窯等を記録化するとともに、製品や道具に関しては、可能な限り、実物を取得した。

とくに、窖窯に関しては、3次元計測やドローン等の今日的な調査手法を取り入れるとともに、後述するように、発掘調査を通じて、廃絶された窖窯の構造を明らかにすることにした。

4. 研究成果

(1) インドシナ半島北半の窯構造の地域性

インドシナ半島における地下式の掘り抜き窯を用いた焼き締め陶器製作の民族誌の比較研究を実施し、図1のとおり、窯構造や造窯技術が著しく異なるA～Dの地域差を明らかにした(徳澤2019)。

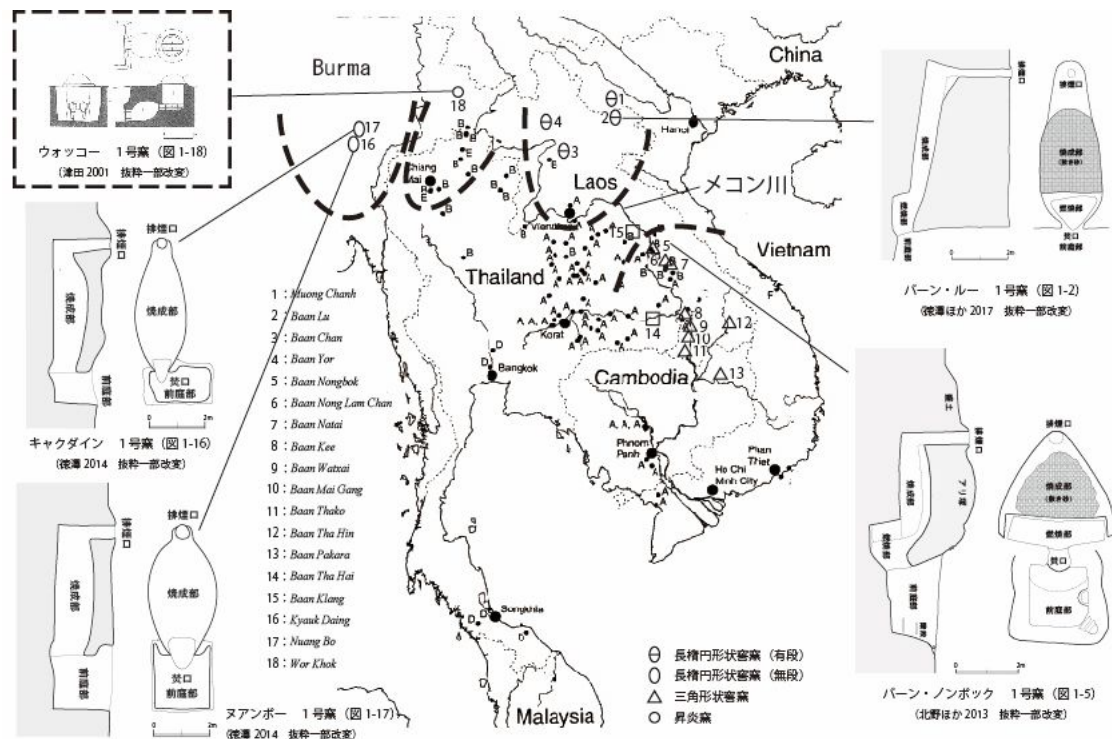


図 インドシナ半島北半における窯構造の地域差 (徳澤2019から抜粋)

- A) ラオス北部以北の(焼成部と燃焼部の境が)有段の長楕円形状窯(メコン川上流)
- B) ラオス中南部からカンボジア北部の三角形形状窯(メコン川中流)
- C) ミャンマー・シャン州インレー湖岸の(焼成部と燃焼部の境が)無段の長楕円形状窯
- D) シャン州東部からタイ北部の昇炎構造をもつ地下式窯

A)は、ベトナム北部のソンラー省ムオンチャイン、ラオス北部のサムヌア県バーン・ルー、ルアンパバーン県バーン・チャン、ルアンナムター県バーン・ヨーでは、焼成部から燃焼部にかけての平面形が長楕円形状を呈し、窯体の全長が長大な窯（以下「長楕円形状窯」と略記）が見られる（徳澤ほか 2016）。

一方、B)は、ラオス中部のタケーク県バーン・ノンボック、中南部のサバナケット県バーン・ノンラムチャン、バーン・ナタイ、カンボジア東部のラッタナキリ州パカラ等で焼成部から燃焼部にかけての平面形が三角形を呈し、三角形の底辺にあたる焼成部の火前側とそこに接続する焼成部に最大幅をもつ窯（以下「三角形窯」と略記）が見られる（徳澤ほか 2017）。

また、C)は、長楕円形状窯のうち、ベトナム北部からラオス北部にかけての地域では、焼成部と燃焼部の境が有段の長楕円形状窯が分布することに対して、ミャンマー東部シャン州では、無段の長楕円形状窯が見られる（徳澤 2019）。

そして、D)は、シャン州東部からチェンマイ県にかけてのA)とC)の境界には、昇炎構造をもつ窯が点在するという窯の地域差を確認することができた（徳澤 2019）。

(2) メコン川中流域西岸タイ東部の窯構造の多様性

メコン川東岸、すなわち、B)の地域では、(1)ですでに述べたとおり、三角形窯が分布している。これらのうち、ラオス南部の焼き締め陶器製作は、ウボンラチャタニーからパクセーを経由し、チャンパサック、アッタープーに移転したことが判明しており、メコン川中流域に関しては、両岸の技術的交流関係を見計らう必要がある。しかしながら、タイは、半島内の先発開国国であるとして、すでに、多くの窯業民族誌が失われている。そのため、タイとラオスの現生の民族誌を見比べると、タイでは、旺盛な焼き締め陶器の需要を背景として、先んじて、さまざまな技術が進取され、焼き締め陶器製作が飛躍的な発展を遂げてきた様子を窺うことができる（徳澤ほか 2018）。

そのため、タイとラオスの両者の対比が難しい状態にあるが、下記のとおりの見通しを得ることができた。メコン川西岸のうち、ウボンラチャタニーからナコンパノムにかけての地域では、かつて窯が用いられていたものの、ほとんどが造り替えの容易な煉瓦積みの上式窯に切り替わり、大型化している。こうした変化は、まず、製作器種の大型化、次に、生産量の増大に対応した結果と考えられる。A)とC)の窯構造の相違は、製作器種の大型化を背景としたものであり、A)からC)の変化が惹き起こされたものと考えられる。そして、窯の拡張限界を克服するために、地上化が図られるようになったと考えられる。

(3) メコン川流域の地理的要因による地域間関係

上記のとおり、これまでの現地調査では、メコン川流域に関して、A)ベトナム北部からラオス北部、そして、B)ラオス中南部から東北部という大きな2つのまとまりが見られた。

また、A)とB)の間に位置する地域、そして、B)の中の一部の地域では、焼き締め陶器製作の空白域が見られる。

A)では、ルアンパバーンのバーン・チャンからルアンナムター県バーン・ヨーに造窯技術が移転しており、また、バーン・チャンからビエンチャンに製品が供給されているとおり、焼き締め陶器の流通圏を含めると、A)の地域圏は、ビエンチャンまで広がることになる。しかしながら、ルアンパバーン北部やA)とB)の間には、乾季になると、水量が減少することで、川底の岩床が露出する流域がある。また、B)の中でも、ラオス南部とカンボジア北部の間には、河川交通の難所と知られるコーンパペン滝があるとおり、両者の間の製品の流通はきわめて希薄である。ルアンパバーン北部、A)とB)の間、そして、B)の中の焼き締め陶器製作の分布の空白は、河川舟運が遮断されることによる、流通圏が分断される事情を反映していると考えられる。しかしながら、バーン・チャンとバーン・ヨー、B)の域内の関係を見ると、こうした空白を越えて、窯構造や造窯技術が共通しているとおり、焼き締め陶器製作の民族誌の地域性は、製品の流通圏と技術の伝播に伴う窯構造の地域差という重層的な構造であることを示している。

以上のとおり、主要な研究成果をまとめたものの、こうした窯構造の地域差や焼き締め陶器製作が地域差をもって段階的に発展していく過程を捉え切れていない。また、こうした事象が惹き起こされる原因やその背景にまで迫ることができていない。

今後、これまでの調査を継続的に推進していくことで、上記のような残された課題に取り組むことにしたい。また、こうした窯を用いた焼き締め陶器製作の民族誌は、当該地域の経済発展が進めば進むほど、その存亡が危ぶまれる。可能な限り、こうした窯業民族誌を記録保存し、研究資源の保全にも尽力していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 徳澤啓一	4. 巻 145
2. 論文標題 タイ東北部における水利環境の変化と水糞とその用途の変遷	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代	6. 最初と最後の頁 187-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徳澤啓一・矢作健二・持田直人	4. 巻 724
2. 論文標題 東南アジア窯業民族誌における粘土紐積み上げ技法	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 15-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徳澤啓一・秦竹軒・持田直人	4. 巻 1
2. 論文標題 シップソンバンナーにおける伝統的土器製作の類型と移転：中国雲南省とミャンマー東部およびタイ北部の関係をめぐる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア地域研究	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徳澤啓一・北野博司・平野裕子・中村祐一	4. 巻 37
2. 論文標題 インドシナ半島東部における窯構造の変容とその背景 -ベトナム北部からカンボジア北東部にかけての焼締陶器製作の民族誌を中心として-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東南アジア考古学	6. 最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳澤啓一・平野裕子・Chhei VISOH・Sureeratana BUBPHA	4. 巻 0
2. 論文標題 ベトナム中部からラオス中南部にかけての「伸ばし」成形の展開と地域差 カンボジア東北部の伝統的土器製作の位置付けをめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 考古学・博物館学の風景（中村浩博士古稀記念論文集）	6. 最初と最後の頁 211-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 徳澤啓一
2. 発表標題 インドシナ半島北部における焼き締め陶器製作と窯構造の地域差
3. 学会等名 日本考古学協会第85回総会研究発表要旨
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳澤啓一・安村健・持田直人
2. 発表標題 メコン川西岸における焼き締め陶器製作と窯構造の特徴
3. 学会等名 日本考古学協会第84回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 持田直人・徳澤啓一・酒井雅代・北野博司
2. 発表標題 タイ東北部及びラオス中部における焼き締め陶器製作に関する現地調査
3. 学会等名 東南アジア考古学会中四国例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 徳澤啓一
2. 発表標題 クレット島における窯跡群の洪水被害とその後 -タイ・ノンタブリー県のモン窯業民族誌の変容
3. 学会等名 東南アジア考古学会中四国例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 徳澤啓一
2. 発表標題 エスノグラフィーとしての博物館展示 -タイ・クレット島における窯業民族誌の展示保存
3. 学会等名 全日本博物館学会2018年度総会・第44回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 徳澤啓一・安村健・持田直人・平山晃基・渡邊圭太
2. 発表標題 タイ東北部における焼き締め陶器製作及び土器製作の現地調査
3. 学会等名 東南アジア考古学会中四国例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 徳澤啓一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 近代文藝社	5. 総ページ数 306
3. 書名 やきもの つくる・うごく・つかう (佐々木幹雄・齋藤正憲編)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----